

「シャーロックホームズから学ぶ生き方」

中学二年 M・H

シャーロックホームズを知らない人はいないだろう。シャーロックホームズとは、十九世紀後半に活躍したイギリスの小説家・アーサー・コナン・ドイルが創作したシャーロックホームズシリーズの主人公であり、これまで数多く映画化、舞台化されており、最も多く映画化された作品としてギネスブックにも載っている。このことからわかるとおりシャーロックホームズは今日まで多くの人に愛され根強い人気がある。その理由は色々あるが、最も大きいのはそのシャーロックホームズ自身の性格、人間性だと私は思う。シャーロックは正義感あふれるかつこよく優しい性格である。人がいい人と言って思い浮かべる人間像は様々だが、きっと彼はそのすべてに当てはまる。そして、シャーロックホームズ物語はミステリー小説なのだが、ミステリー小説に限らず物語には大抵の場合悪役が登場する。それは、主人公たちの優しさや正しさをより表すためだとか色々あるが時々主人公本人が悪役になる場合がある。それによって考えさせる小説などもある。しかし、そのような小説を読んだり映画を見たりしたとき、中には裏切られたとか少し悲しいとか思う人もいる。人はやはり主人公に感情移入したり主人公を正義のヒーロー正しい人としていたいという欲望があるのだろう。そういう意味でホームズは絶対に読者を裏切らない正しくあってくれろという安心感がある。それも魅力の一つなのではないかと思う。

そんなシャーロックホームズシリーズには沢山の心を打つ名言がある。そんな名言の中で、私が特に気に入っている、考えさせてくれるものだと思っているものをいくつか紹介する。

まず一つ目。

「自分の失敗を語るのに躊躇はしない。」

これは『緋色の研究』というシャーロックホームズシリーズ最初

の作品だ。そして、ホームズの相棒である医者ワトソンと出会ったのもこの作品だ。因みに緋色というのはやや黄色味のある鮮やかな赤のこと。緋色という言葉だけでも少しミステリアスだが緋色がどのような色なのか知るとますます魅力的に感じる。赤系統の色は沢山あるがその中でも、緋色という色を選んだのはミステリアス感を描くと同時に少し明るさも描きたかったのかもしれない。そんな記念すべき第一巻で登場したこのセリフは簡単なようでなかなかできないことを言っている。普通の人は私も含めて失敗を語ろうにもプライドというものが邪魔してなかなか言えないものだ。しかし、ホームズは軽々と自分の失敗や過ちを語り、自分のすべてをさらけ出すことができる。数々の難事件を解決することができる優秀な脳を持ちながらも決して上から目線にならない性格には多くの人が憧れや尊敬の念を示し惹かれる人も多い。きっとホームズがこうできるのは失敗を失敗のまままで終わらせず次に繋げていくこと、立ち直っていくことを知っているからだだろう。

## 二つ目は

「不可能を除外していつて最後に残ったものがどんなに奇妙なことであつたとしても、それが真実となる。」

これもなかなか難しいことだと思う。因みにこれは『緑柱石の王冠』での一言だ。真実を見つけるうえで客観的に周りを普段は見ている人でも時々主観が入り交じり正確な判断ができない場合がある。真実が分かってもそんなはずない何かの間違いだと現実からついなる時もありたくさんあるだろう。誰だって人間だから。しかし、この世界においてはそんなのは認められない。主観や自分の思いというのは時々邪魔になる時がある。そのようなことをホームズは決してしない。ただ真実へと真つすぐまっすぐ突き進んでいる。その強い正義感に感動させられると同時に、ホームズにはそのように感じる相手がいるのか、どうしてそこまで前だけを客観的に見ていけるのか不思議になるし、ホームズの冷徹さが少しでたセリフなのではないかと思う。しかしこの時の彼の気持ちはわからないがもしか

たら、本当はホームズも信じたくはなかったのかもしれない。そのうえで自分に言い聞かせるように自分を正常に戻す為に放った言葉なのかもしれない。このセリフは客観的に物事をみる、前を見る大切さと辛さを教えてくれた。

三つ目は

「君を確実に破滅させる事ができるならば、公共の利益の為に僕は喜んで死を受け付けよう。」

これは『最後の事件』でホームズが宿敵モリアーティ教授に放ったセリフだ。喜んで死を受け付けようだなんて言い過ぎだという意見もあるが私は、最もホームズらしさが現れたセリフだと思う。自分の命よりも正義を守る。それが正しいか正しくないかはわからないが、今時こんな風に考えられる人なんているだろうか。時々人には命よりも大切なものが存在する。ホームズにとっての正義がそれにあたるのだろうか。モリアーティ教授は今まで沢山の罪を犯してきた。しかし、彼も頭がよく警察に捕まるような証拠は一切残さずに実行するのだ。おそらくモリアーティ教授の恐ろしさを知っているのはほんのわずかな人しかいないだろう。その人たちが警察に訴えればいいがそんなことしても証拠はないし、社会の上ではモリアーティ教授は善者だから、誰も信じてくれない。それをモリアーティ教授は知っているしもちろんホームズも知っている。だからこのような方法を選んだのだろう。ホームズが一番熱い部分が現れた部分なのではないか。この時ホームズとモリアーティ教授はライヘンバッハの滝で戦った。それによってモリアーティ教授は崖に落ちて死ぬ。ホームズも最初は死んだ設定だったが批判が殺到したため、後に実は奇跡的に生きていた、という設定に変えられた。この出来事はさすがはホームズという感じだ。どれだけ彼が愛され英雄とされてきたかがよくわかる。しかし、このモリアーティ教授というのまただの悪党というだけではなく色々な事を教えてくれる。モリアーティは沢山の悪事を働いてきたが、ただの殺人鬼やおかしい人間としてとらえられない人間としての生々しさがある。それに、なによりモ

リアーティ教授という宿敵あつてのホームズだ。やはり、この物語において、モリアーティ教授も大きな役割を担っているのは確かだろう。

この物語には他にも沢山の名言があるが今回私が取り上げた三つの名言からわかるのは「失敗も全部さらけ出すこと、そして失敗を失敗のまま終わらせないこと。」「物事を客観視することの大切さ」「時には命よりも大切なものがあるということ。」

そして、思いを言葉に出すことの大切さ。私たちは、日々当たり前前にコミュニケーションをとっている。とる相手は家族、友達、先生と様々だ。ほとんどの場合ちゃんと言葉に出さないと伝わらない。変に思われるのではないか、嫌がられるのではないかと思ひ、逃げてばかりではおそろくダメなのだ。人間というのは矛盾していて、自分の本心を見破られたくないと隠す癖にいざというときにきつと言葉に出さなくても伝わるだろうと勝手に信じ、伝わらないとなんてわからないのと怒る。人間は超能力集団ではない。相手の考えていることをズバツと言ひ当てるなんて不可能だ。だから、人間には言葉というものが与えられた。言葉は使い勝手が悪い。言葉をうまく操れる人なんてそうそういない。その使い勝手の悪さのせいでみんな迷ひ戸惑う。自分の思っていることが真つすぐ相手に届かない。言葉は刃物だという。確かにそうだ。使い方を間違えると大変なことになる。しかし、刃物は使い方さえ正しく理解できれば、便利な道具に代わる。言葉もそうなのだと思う。言葉を正しく使うために便利に使うために。言葉を発する前に私は少し考えてみようと思う。これで正しいのか。いいのかと。車も飛行機も新幹線もちゃんと機能するか確認してから、使い始める。それと同じようにこれでちゃんと確認してから、発していききたい。それで間違えたら仕方がない。その時はそれがいいと思つたのなら。人はエスパーではない。予知能力などない。発する前に少しだけ確認して後は後先考えず、発してみるといいことなのではないか。